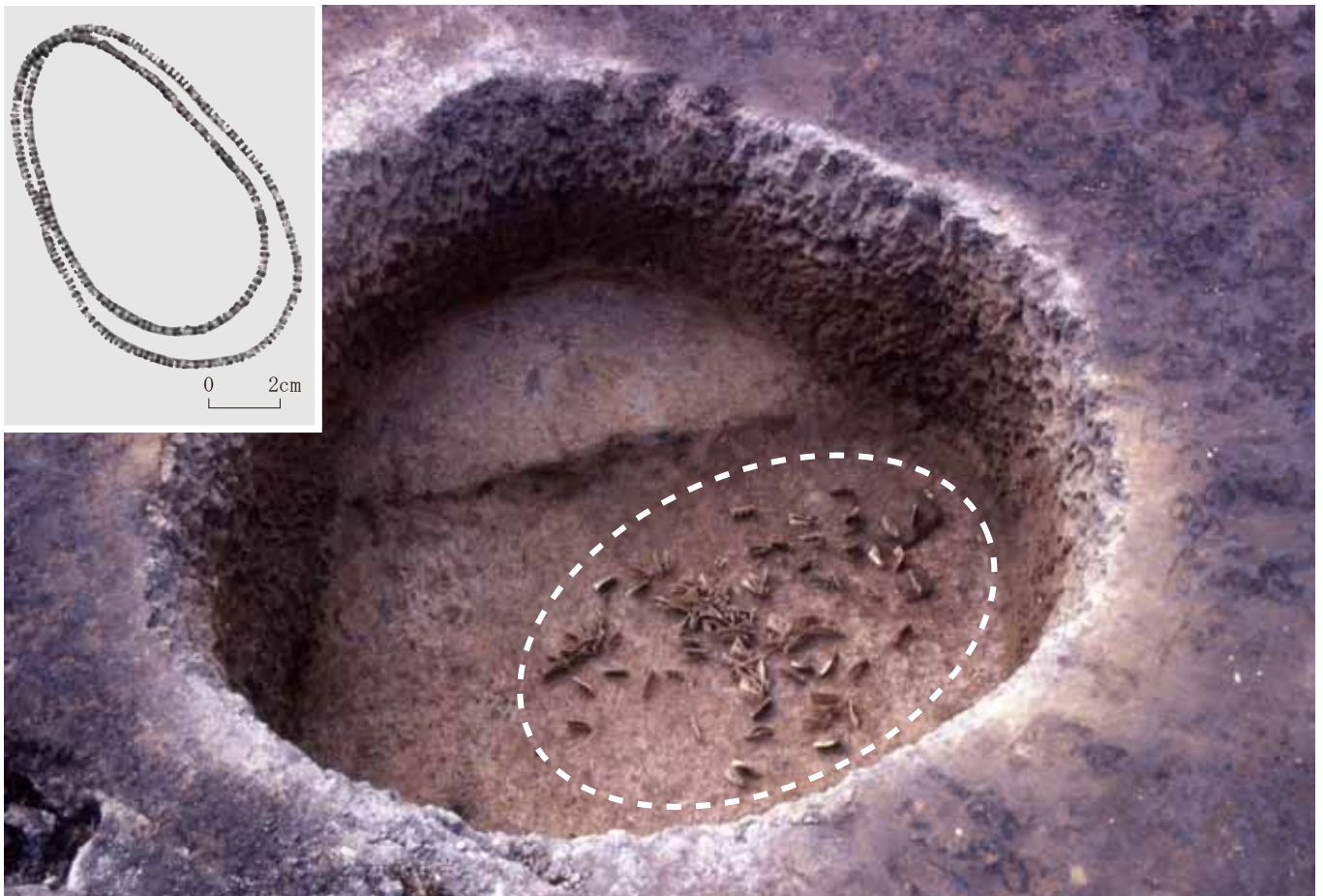


埋蔵文化財調査室ニュースレター

■ 特集 続縄文・擦文の墓

北大構内から発見された遺跡には、複数の住居址が検出された集落址、短期間営まれたキャンプなど、さまざまな性格のものが確認されていますが、その中には墓も含まれます。死者を敬い埋葬することは最もヒトらしい行為で、その起源は、中期旧石器時代に遡るとい説もあります。しかしながら、酸性土壌の強い日本列島では、亡骸が残ることはまれです。そのため考古学的に墓の根拠となるのは、副葬品・装身具、供献品、墓坑内に遺存する赤色顔料といった状況証拠です。墓からわかることは、往時の人たちの1) 墓制（墓のつくり方、及び副葬・供献品を含む埋葬方法）、2) 信仰・儀礼、3) 集団の規模などです。保守的で最も変わりにくいとされる墓制の変化は、大きな社会的変化を示唆すると考えられます。本特集では、北大構内遺跡、及び周辺の遺跡から発見された墓について、紹介します。



▲北大構内のK39遺跡ポプラ並木東地区地点3号墓と滑石製首飾り

径約1.1mの不整形の土坑墓で、深さ約0.5mあります。この大きさから屈葬と考えられます。この墓からは、滑石製首飾りが発見されています(点線範囲)。滑石製平玉は、径1.9mm~3.6mmで、中央が穿孔されています。道内産の石材を用いていることから、道内で製作されたものとみられます。時期は、続縄文文化終末期(5~6世紀)と考えられています。

北大構内、及び周辺の遺跡から発見された墓



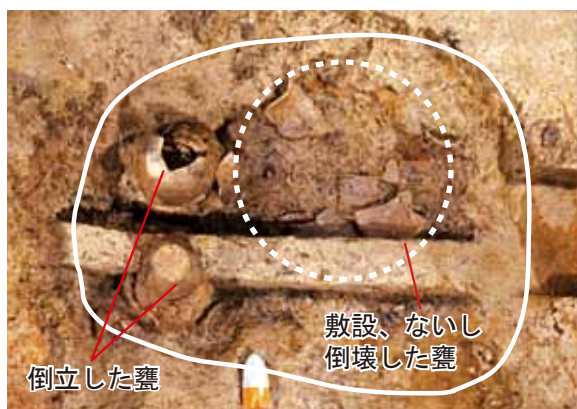
▲医学部陽子線研究施設地点の「北海道式古墳」
半分ほどしか調査されていないので、その全貌は不明ながら、未調査部分に墓坑があるものと考えられます。時期は、擦文文化（8世紀）です。



▲北7条西6丁目地点の「北海道式古墳」
(写真:札幌市埋蔵文化財センター蔵)
周溝がめぐり、中央部付近に墓坑が2基、設けられています。周溝が途切れた部分は、開口部で、墓前への入口とみられます。この「北海道式古墳」からは、副葬・供献品は発見されていません。時期は、擦文文化（8～9世紀）です。



▲ポプラ並木東地区地点1号墓とガラス玉
不整楕円の土坑墓で、長軸1.2m、短軸0.9m、深さ約0.5mあります。この大きさから屈葬と考えられます。この墓からは、濃紺色ガラス玉2点、薄緑色のガラス玉1点が出土しています。道内には、ガラス玉を製作していた遺跡は知られていませんので、本州からの交易品とみられます。



◀恵迪寮地点の土坑墓
隅丸方形の土坑墓で、長軸1.5m、短軸1.2m、深さ約0.3mあります。この大きさから屈葬と考えられます。土坑墓からは、ほぼ完形の甕2点が倒立した状態で出土しています。その東側からは、甕の破片などが敷設、あるいは倒壊した状態で発見されています。時期は、擦文文化（9世紀頃）です。

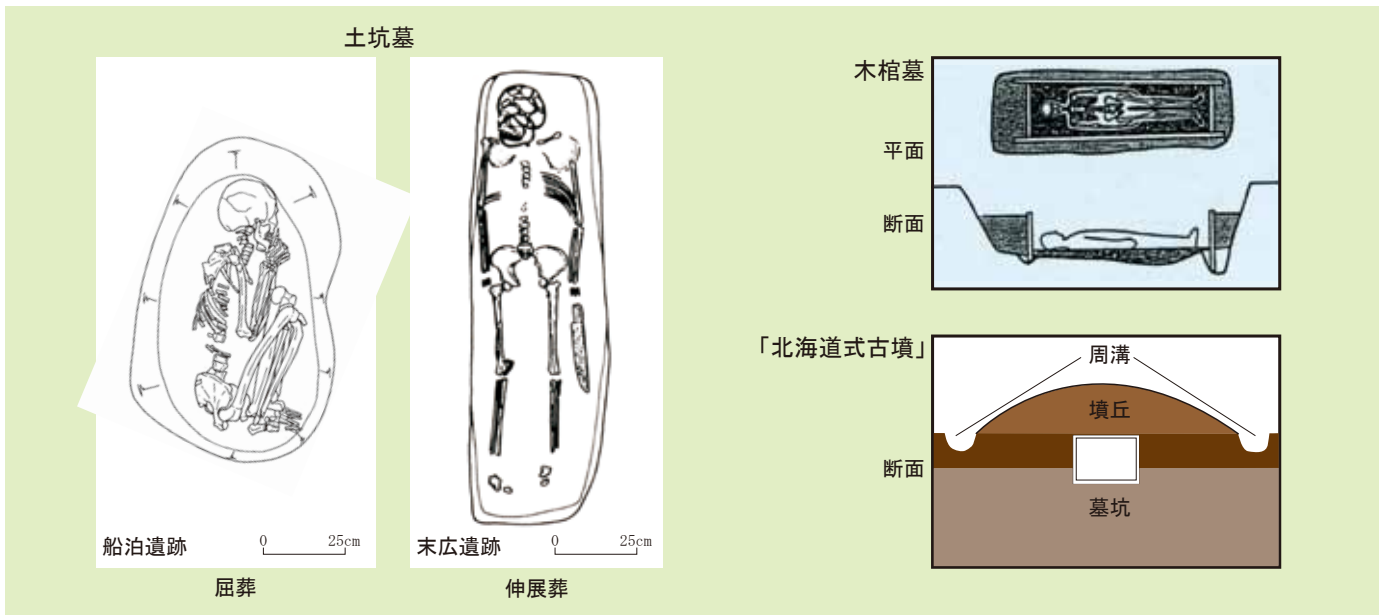
K39遺跡から発見された墓の一覧

No.	地点名	墓の形態	墓の数	副葬・供献品など	時期	文献
1	ポプラ並木東地区地点	不整楕円の土坑墓	7基	1号墓-ガラス玉3点 3号墓-滑石製首飾り	続縄文文化 終末期 (5～6世紀)	北大埋蔵文化財調査室 『北大構内の遺跡5』
2	医学部陽子線研究施設地点	「北海道式古墳」 径約7m	不明	鉄製鍬/鋤先 甕 鉢形土器	擦文文化 (8世紀)	北大埋蔵文化財調査室 『北大構内の遺跡XX』
3	北7条西6丁目地点	「北海道式古墳」 径約7m、西側に開口部あり	2基	なし	擦文文化 (8～9世紀)	札幌市教育委員会 『平成16～20年度調査報告書』
4	恵迪寮地点	隅丸方形の土坑墓	1基	甕など	擦文文化 (9世紀頃)	北大埋蔵文化財調査室 『サクシュコトニ川遺跡』

墓の種類と埋葬方法

構内、及び周辺の遺跡から発見された墓は、続縄文文化と擦文文化のものです。該期の墓は、基本的に地中に墓坑を掘り、亡骸を埋葬する土坑墓です。7世紀には、墓坑の内側を木材で囲んで造った木棺墓と称される墓が出現します。8世紀～9世紀には、墓坑の周りに溝を掘削し、その土を盛土することで墳丘とする「北海道式古墳」が造成されます。

これらの墓坑には、体を強く折り曲げた状態の屈葬、あるいは、全身を伸ばした状態の伸展葬で埋葬されます。屈葬は、縄文文化以来の伝統的な埋葬方法で、続縄文文化、擦文文化にも受け継がれます。伸展葬は、縄文文化にもみられますが、続縄文文化では皆無に等しい状態ですので、擦文文化で再び出現したとみられる埋葬方法です。



副葬・供献品の消長

- 1: K39 遺跡ポプラ並木東地区地点出土ガラス玉
- 2: 苫小牧市タコブ遺跡出土、注口土器
- 3: 江別市後藤遺跡出土、把手付須恵器杯
- 4: 恵庭市西島松5遺跡出土、鉄斧
- 5: K39 遺跡医学部陽子線研究施設地点出土、鉄製鎌 / 鋤先
- 6: 恵庭市西島松5遺跡出土、刀子
- 7: 恵庭市西島松5遺跡出土、藤手刀 (縮尺不同)

『西島松5遺跡(2)』、『タコブ』、『江別古墳群：石狩平野を望む北の古墳』、『古代北方世界に生きた人びと：交流と交易』から作成

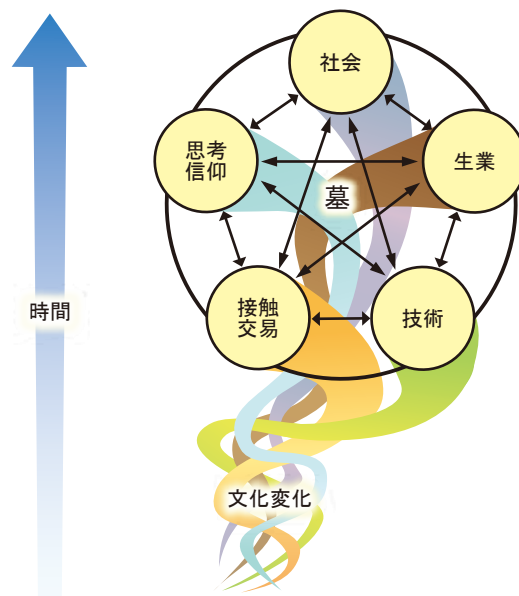


続縄文文化後半期の副葬・供献品としては、土器、装飾品（玉類）が知られています。擦文文化では、副葬品としての装飾品はなくなります。擦文文化で増加するのは、鉄鎌、太刀、刀子、鉄斧、農耕具等の鉄器です。これら多くの鉄器は、本州からの交易品とみられ、生活形態の変化を示しています。特に、鉄製農耕具の出現は、該期における農耕生産の重要性を示唆しているのでしょうか。「北海道式古墳」という新たな墓が出現する8世紀～10世紀は、北海道と律令国家のインターアクションが強まる時期で、大きな社会的変化が看取されます。

墓と考古学

埋葬という行為は、故人を葬るとともに、それを執行する生者にとっては、その後これまでの社会を継承、再生産していくことでもあります。墓には、痕跡的であるにせよ墓制、信仰・儀礼、集団の規模、副葬品の中に含まれる交易品を通じたインターアクションなど、往時の社会システム全般に関する多様な情報が含まれています。考古学者が墓を研究するのは、こうした情報が考古学研究における中心的位置を占めるからです。

構内で墓が発見された地点は、まだまだ少ないですが、墓の変化は往時の社会的変化を示唆しているはずで、それを今後、さらに解明していく必要があります。



考古学における墓研究の占める位置
(Renfrew, C., & Bahn, P., 2004. *Archaeology: Theories, Methods and Practice* 176 頁の図を改変)

第7回調査成果報告会の開催

平成27年2月1日（日）に、北海道大学埋蔵文化財調査室第7回調査成果報告会を開催しました。第Ⅰ部では、当調査室室員が2013・2014年度に実施された調査の概要、大学病院ゼミナール棟地点、農学部実験実習棟地点、人獣共通感染症研究拠点施設地点の調査について発表を行いました。第Ⅱ部では、北海道立総合研究機構地質研究所の川上源太郎先生に「石狩平野の形成史—沖積層のはなし—」という題目で、石狩平野の形成過程についてご講演をしていただきました。当日、99名の方に参加をいただき、盛会でした。



▲当調査室室員の発表



▲川上源太郎先生の講演



▲会場での展示品見学

編集後記

本特集の作成につきまして、以下の諸機関、諸氏から御教示・高配をいただきました(敬称略)。秋山洋司、高橋美鈴、野月寿彦、札幌市埋蔵文化財センター。御礼申し上げます(坂口)

北海道大学埋蔵文化財調査室ニュースレター 第19号
平成27(2015)年3月20日発行

発行 : 北海道大学埋蔵文化財調査室
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話 : 011-706-2671 FAX : 011-706-2094

e-mail : hokudaimaibun@gmail.com

URL : <http://www.hucc.hokudai.ac.jp/~q16697/maibun/index.html>